

令和5年度 学校評価 総括評価表

徳島県立徳島視覚支援学校

学校経営方針

1 徳島県教育の基本方針

未知の世界に果敢に挑戦する、夢と志あふれる「人財」の育成を目指します。

「徳島ならではの」教育により、大きな夢や高い目標をもって、未知の世界に果敢に挑戦する、本県の宝である「人財」の育成を目指します。

2 徳島視覚支援学校の使命

徳島視覚支援学校は徳島聴覚支援学校と同じ校舎内に独立して併置する全国でも類のない学校である。両校が連携・協働し、「幼児児童生徒の夢と希望につながる保育・教育」を行うとともに、県内唯一の視覚障がい教育を担う学校としての役割を果たし、「共生社会の形成につながる特別支援教育」を推進する。

3 めざす学校像

- (1) 幼児児童生徒の人権を尊重し、一人一人を大切に教育を学校におけるすべての教育活動をとおして行う学校
- (2) 視覚障がいや多様な障がいのある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導及び必要な支援ができる学校
- (3) 視覚障がいの専門性を校内外で発揮できる学校

4 本年度の重点目標

- (1) 幼児児童生徒一人ひとりの障がい特性と教育的ニーズを踏まえた教育・保育活動や生徒指導に取り組みます。
 - ・ICT教育のステージを高め、家庭や関係機関との連携の場でさらに利活用します。
 - ・学校と家庭、寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の応用性を高めます。
- (2) 幼児児童生徒のライフステージを見据え、個別の教育支援計画や個別の指導計画を関係機関と共有することで、卒業後につながるキャリア教育を推進します。
- (3) 県内唯一の視覚障がい領域を対象とした特別支援学校として、学校全体で教育相談に対応するとともに、県内の視覚障がいのある幼児児童生徒や学校・教職員に対する持続可能なセンター的機能の取組を充実します。
- (4) 地域社会と連携した取組や、各学校・園との交流及び共同学習を改めて推進するとともに、視覚障がい教育への理解・啓発及びその取組発信に努めます。

重点目標(1)	幼児児童生徒一人ひとりの障がい特性と教育的ニーズを踏まえた教育・保育活動や生徒指導に取り組みます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
学部の目標 課の目標 寄宿舎の目標	幼児が自分の身の回りのことを自分でしようとする意欲を高め、少ない支援でできる身の回りのことを増やしていける保育を実践します。				
幼稚園部	<ul style="list-style-type: none"> 様々な活動に意欲的に取り組み、自分でできる身の回りのことを増やす。 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活動作のうち、荷物の片付けや着替え、ハンカチの使用といった3つの活動が一人で行える。 保育室内の環境や幼児が扱う物の置き場所、扱う物の見直し等を行う。 OTによるコンサルテーション年間1回以上受け、幼児の手指操作の発達段階を専門家に見てもらおうと共に、手指操作の発達を促せるような活動を保育の中に取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 決められた場所に連絡帳や水筒を出したり、着替えやハンカチを使ったりすることが一人で行えた。 棚の中に段ボールで仕切りを設けたり、幼児がより扱いやすい大きさの道具を準備したりした。 OTによるコンサルテーションを1回受け、幼児の手指操作の実態について助言を受け、活動を保育の中に取り入れた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 今後も、自分でできる身の回りのことをより増やし、自信をもって取り組むことができるように、場所ごとに環境を準備したりステップアップした素材を用いたりして、幼児の成長に応じた環境を整えていく。
エピソード					
重点目標(1)	幼児児童生徒一人ひとりの障がい特性と教育的ニーズを踏まえた教育・保育活動や生徒指導に取り組みます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
学部の目標 課の目標 寄宿舎の目標	児童の障がいの特性に応じた教育活動につなげるために、児童の集団活動の場や家庭や関係機関との連携の場において、効果的なICT活用に取り組む。				
小学部	<ul style="list-style-type: none"> ①集団活動の場において、児童の実態に応じてICT機器を活用した活動を行う。 ②授業や行事の様子を録画したものを活用し、懇談時等で個別の指導計画の目標達成状況等を保護者と共有する。 ③家庭での体調調整期間において、オンライン授業を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ※各学級で、①～⑤の項目のうち3項目以上に取り組む。 ①ICT機器を活用した集団活動の機会を、年間9回以上設ける。 ②学期に1回以上実施する。 ③必要に応じて実施する。 ④訓練見学や児童デイサービスへの見学を実施した場合に活用する。 ⑤児童に応じたコンサルテーションを受講し、録画した映像での情報共有を年間1回以上行う。 ⑥年間3ケース以上実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学級とも4項目について取り組んだ。 ①学部集会の進行等の係活動で年間8回の他、年間を通して朝の会の進行の係活動で活用した。 ②学期に1～2回懇談時に保護者と共有した他、家庭に持ち帰り他の家族とも共有した。また、宿泊学習等の事前学習で使用した自作教 		<ul style="list-style-type: none"> ・iPadを児童が使う時、「タッチした時に反応しない。逆に反応しすぎる」等機能的な面、また、教員のスキルや自作教材を作る時間の捻出等の課題が上がった。 ・アプリを活用した自作教材等の情報交換を1月に行ったが、各学級の取り組みで参考になることが多かったため、次年度はこの情報交換をする時期を早めたり、回数を多くしたりし、

	<p>④児童の関係機関との連携の場で、学校の様子を撮影したものを活用し、アドバイスを受けたり共通理解等に生かしたりする。</p> <p>⑤児童の普段の授業や生活の様子を録画したものをOT、ST、PTのコンサルテーション時に活用しアドバイスを受ける。</p> <p>⑥学部内で各学級の取り組みについてのケース会を行う。</p>		<p>材を持ち帰り、家庭でも保護者と共に取り組んだ。</p> <p>③準備を行っていたが、児童の体調等により実施しなかった。</p> <p>④児童が通っている訓練や放課後等デイサービスの見学時に動画を活用し関係機関の担当者からアドバイスを受けたり、共通理解はなかった。</p> <p>⑤全学級で各コンサルテーション時に活用しアドバイスを受けることができた。</p> <p>⑥学部研修でケース会を3ケース以上行い、情報交換を行うことができた。</p>	A		ICT機器を活用する場をより広げられるようにしたい。
エピソード	<p>・6項目の具体的な活動計画について、6月に各学級で取り組む項目を3項目以上決め、年間を通して計画的に取り組んだ。</p> <p>・その他の取組として、別室で学習する児童に対し、オンライン授業を実施したり、児童の欠席中に演奏会や読み聞かせ等の行事の様子、友達や教員からのメッセージ動画をTeamsで家庭に送った。</p>					
重点目標(1)	幼児児童生徒一人ひとりの障がい特性と教育的ニーズを踏まえた教育・保育活動や生徒指導に取り組めます。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
学部の目標	ICT機器を活用し、生徒の支援方法の共通理解に取り組む。					
中学部	<p>・学校での学習の様子や教材の活用方法を記録し、教員間、家庭、寄宿舎、関係機関と支援方法の共通理解に取り組む。</p>	<p>①学習の様子、新しい教材、支援方法の変更点、コンサルテーションの指導助言内容等をタブレット端末に記録する。</p> <p>②学部研修やTeamsを活用し、年間10回以上教員間で情報共有を行う。</p> <p>③Teamsを活用し、寄宿舎指導員と週1回以上情報共有を行う。</p> <p>④生徒の実態に応じて学期に1回以上家庭にタブレット端末を持ち帰り、授業の様子等を見ていただく機会を設ける。</p> <p>⑤訓練見学等の際に、学校での支援の様子等を見ていただき、助言を受けたり、訓練の様子を撮影させていただき、教員間で共有したりして、生徒の支援に生かす。</p>	<p>・学習の様子や教材、コンサルテーションの助言等をタブレット端末に記録し、学部研修やTeamsを利用して教員間で共有することができた。</p> <p>・Teamsを活用して寄宿舎指導員と生徒の情報共有を行うことができた。</p> <p>・生徒の状況に応じて長期休み等に持ち帰り、生徒の普段の様子を見ていただいたり、音楽を聴くなど授業の教材を家庭と共有したりすることができた。</p> <p>・訓練の様子を撮影し、教員間で共通理解できた。</p>	A		<p>・持ち帰りの方法や学習ポータルを活用など家庭との連携や情報交換が円滑にできるよう、さらなる利活用を考えていく必要がある。</p> <p>・他学部の教員や寄宿舎指導員との情報交換にも積極的に活用していきたい。</p>
エピソード	<p>・家庭に学校の授業の様子等を入れたタブレット端末を持ち帰ることで、「学校で頑張っている姿がよくわかりました」と言っていたことがあった。</p>					

重点目標(1)		幼児児童生徒一人ひとりの障がい特性と教育的ニーズを踏まえた教育・保育活動や生徒指導に取り組みます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方針	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
学部の目標 課の目標 寄宿舎の目標	一人ひとりに応じて日々の学習活動や行事・家庭学習においてICTを活用し学びを深める。					
高等部普通科	<p>具体的な活動計画 授業・学校行事に見通しが持てるよう、生徒一人ひとりの見え方に応じたICTの活用をする。</p>	<p>一人ひとりに応じてiPadやGspeak等で「修学旅行のしおり」を作成し授業や家庭学習で活用する。(授業での活用5回以上)</p> <p>・アプリケーションやICT機器を提案し、家庭と相談しながら生徒が活用できるツールや場面を1人一つ以上増やす。(A組)</p> <p>・技能検定合格に向けて活動の様子を動画撮影し、授業の振り返りに活用すると共に家庭でも成長や課題を共有する。(授業の振り返りに5回以上、活動の様子動画提供を5回以上)(3年)</p>	<p>一人ひとりに応じたICT機器で作成した「修学旅行のしおり」で事前学習・事後学習や当日の活動の見通しに活用した。(授業での活用5回)</p> <p>・アプリ(ルーティンタイマー)、ヴォイスレコーダー、ガーミン等新たに授業内で活用方法を習得し他の場面で般化できた。</p> <p>・技能検定合格に向け、活動を撮影し、授業の振り返りに活用できた。(20回)面接練習・ダスタークロス・自在ぼうき・テーブル拭きなど動画を家庭と共有した(8回)</p>	A		<p>・新たに入学してくる生徒の実態把握に努め、個々に応じた支援・学習活動を検討する。</p> <p>・卒業を控えた生徒については、卒業後に利用する施設や家庭において活用可能なICT機器の活用を進める。</p>
エピソード	<p>・iPadのアプリ「プログラミングゼミ」で作成した「修学旅行のしおり」を活用した。</p> <p>・iPadのアプリ「ルーティンタイマー」を活用して、朝の準備がスムーズにできるようになった。</p> <p>・Gspeakで作成した「修学旅行のしおり」を活用した。</p>					
重点目標(1)		幼児児童生徒一人ひとりの障がい特性と教育的ニーズを踏まえた教育・保育活動や生徒指導に取り組みます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方針	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
学部の目標 課の目標 寄宿舎の目標	生徒1人1人の見え方や特性に応じた学習方法の提案(ICTの活用を含む)をすることで、生徒個々の学習方法の確立を図る。					
高等部・職業学課	<p>生徒一人一人の見え方に応じて、視覚補助具やICT機器を活用し、授業や家庭で学習しやすい環境を整えられるよう支援していく。</p>	<p>学期に1回、または、見え方に変化があったときに、見え方について生徒に聞き取りを行うと同時に教員間でも共有し、状況に応じて授業資料や視覚補助具の変更、ICT機器の調整を行う。</p>	<p>学期初めに1回、また、目の手術後や見えにくそうにする様子があった際に、聞き取りを行った。その情報を教員間で共有して、文字サイズの変更やICT機器の使い方を提案し、見え方に応じた学習環境を調整した。</p>	A		<p>生徒の見え方が変化していったケースがあり、今後も現在の学習環境を変更する必要があるとされる。</p> <p>引き続き、生徒の見え方を教員間で共有し、見え方に応じた学習環境作りに努めていく必要がある。</p>
エピソード						

重点目標(4)	地域社会と連携した取組や、各学校・園との交流及び共同学習を改めて推進するとともに、視覚障がい教育への理解・啓発及びその取組発信に努めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
学部の目標 課の目標 寄宿舎の目標	地域住民や徳島聴覚支援学校と連携し「防災体験活動」を行うことで、両校や地域とのつながりを深めると共に、本校に対する理解の推進を図る。				
渉外・安全課	<ul style="list-style-type: none"> 地域の福祉避難所としての役割を果たすため、地域住民と聴覚支援学校と共に、避難所開設までの手順や動きについて再確認し、避難者が円滑に利用できるよう共通理解を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 「福祉避難所」について徳島市防災対策課の担当者から講習を受ける。 講習をもとに、福祉避難所開設までの手順を記した「避難所開設キット」を用い、実際に福祉避難所設営シミュレーションを行う。幼児児童生徒が校内にいる想定で行う。 八万地区の自主防災の方や徳島市防災対策課の担当者との話し合いや情報交換の機会を3回以上持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 避難所を開設するまでの手順、流れの確認ができた。 地域の方がコントローラー役、教職員がプレイヤー役で、ファーストミッション、セカンドミッションの実動訓練を実施し、避難所開設までの一連の流れを学ぶことができた。研修時間に限りがあり、それぞれの活動をフィードバックする時間が持てなかったため、アンケートをまとめ、後日、振り返りの資料を作成し、改善点や感想等を話し合う時間を持った。 対面や電話で情報交換等の機会を3回以上持つことができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 「学校と地域との共助」という観点からも、障がい児・者への理解を深めていただけるように、今後も合同防災学習を継続し、交流を深めていきたい。
エピソード	<ul style="list-style-type: none"> 午前の部では視覚・聴覚の児童生徒、保護者、教職員が参加し、煙体験や起震車体験、水消火器訓練、ヘルメット装着練習、簡易トイレの組み立て等の防災学習に取り組んだ。これらの体験を通し、災害についての意識を高めることができた。 消防署や防災対策課への協力依頼や連絡については自主防災の方が中心になり、対応して下さった。 				

重点目標(4)	地域社会と連携した取組や、各学校・園との交流及び共同学習を改めて推進するとともに、視覚障がい教育への理解・啓発及びその取組発信に努めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
学部の目標 課の目標 寄宿舎の目標	・ホームページを活用して、行事等の情報を発信し、広報活動に努めます。				
教務課	・ホームページの充実を図り、広報活動に努める。	・各式典ごと(5回以上)、実施後に実施内容や写真を掲載する。 ・オープンスクールについて、案内及び当日の様子についてホームページに掲載する。	・入学式、各学期始業式・終業式において、学校長の話や先生の話などについて、5回以上掲載し広報活動に努めた。卒業式の様子についても掲載する予定である。 ・視聴合同のオープンスクールでは、事前に案内のパンフレットをホームページに掲載し、外部への広報を行った。当日は保護者や事業所の方々数名が来校され、その様子について掲載した。専攻科のオープンスクールについては、事前に関係各所にチラシを配付し、広報活動に努めた。3組の方が、来校し、本校の取組について伝えることができた。	A	・引き続き、多くの方々に本校の取組を知っていただけるよう、ホームページでの発信回数を増やしていく。
エピソード	・各終業式における学校長からの各学部振り返りの話では、学校長からの問いかけに返事をしたり、自分たちの話が聞かれたりしたときには笑顔が見られたりする様子が見られた。 ・第3学期始業式での、大谷選手からいただいたグローブの紹介では、1人1人が手に取って触感を確かめたり、手を入れたりして真剣な表情や楽しんでいる表情が見られた。				

重点目標(4)	地域社会と連携した取組や、各学校・園との交流及び共同学習を改めて推進するとともに、視覚障がい教育への理解・啓発及びその取組発信に努めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
学部の目標 課の目標 寄宿舎の目標	他校との交流及び共同学習を推進することで視覚障がい教育への理解・啓発に努めます。				

生徒活動課	・徳島聴覚支援学校をはじめ、他校との交流及び共同学習を推進し、ともに学ぶことにより視覚障がい教育への理解・啓発の機会を設ける。	・薬物乱用防止教室や、携帯スマホ安全教室、文化祭などの学校行事等において、聴覚支援学校と年2回以上の共同学習や交流が実施できるよう計画する。また、他校との交流の機会を積極的に設けるよう働きかけ、昨年度より多く実施できるようにする。	・徳島聴覚支援学校と合同で、薬物乱用防止教室や携帯スマホ安全教室を実施した。また、徳島聴覚支援学校文化祭で高等部普通科が作品展示を行った。(年3回) ・城南高校文化祭で、高等部普通科が展示コーナーを設け、視覚障がいへの理解・啓発に努めることができた。また、幼稚部児童が居住地校交流を実施し、居住地校の園児と交流を深めるとともに交流先職員の視覚障がい教育への理解・啓発を行うことができた。	A		・感染症流行等の懸念もあり、他校との交流及び共同学習の場で、生徒同士が直接関わり合う機会が少なかった。次年度は学習の進め方を工夫したい。また、地域社会での交流の機会を、全学年に向けて積極的に案内し、さらなる視覚障がい教育の理解・啓発に努めたい。
エピソード						
重点目標(1)	幼児児童生徒一人ひとりの障がい特性と教育的ニーズを踏まえた教育・保育活動や生徒指導に取り組みます。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
学部の目標 課の目標 寄宿舎の目標	幼児児童生徒の発達段階に応じた人権教育の充実を図る。					
人権・キャリア教育課	人権教育年間計画の作成時に、人権教育を通じて行われる資質・能力の3つの側面(①知識的側面②価値的・態度的側面③技能的側面)を周知し、3つの側面をもとに人権教育を実践する。	・3つの側面を評価基準に人権年間計画を作成し、それぞれの学部学科で実践する。全てのクラスおよびHRの計画で評価項目に3つの側面が80%以上で記入されている。	・人権教育年間計画の作成時には人権教育を通じて行われる資質・能力の3つの側面について資料を提示し広報を図り、全てのクラスおよびHRで評価基準に3つの側面が記された計画を作成し教育実践を行うことができた。	A		来年度も人権教育年間計画作成の際には、人権教育を通じて行われる資質・能力の3つの側面について職員会議等を通じて広報し、全てのクラスおよびHRで上記の側面が評価項目に設定された年間計画が作成できるようにしたい。
エピソード						

重点目標(2)	幼児児童生徒のライフステージを見据え、個別の教育支援計画や個別の指導計画を関係機関と共有することで、卒業後につながるキャリア教育を推進します。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
学部の目標 課の目標 寄宿舎の目標	幼児児童生徒のライフステージや発達段階、適性に応じたキャリア教育及び進路指導の充実を図る。					
人権・キャリア教育課	・幼稚部から高等部の幼児児童生徒の社会的・職業的自立に向け、キャリア教育全体計画をもとに、それぞれの学部学科で実践する。	・幼稚部・小学部は、個別ファイルを活用し家庭の協力を得て、個々の発達段階に応じたチャレンジウィークを実施する。80%以上の実施率を得る。	・懇談等で、個々に応じたチャレンジウィークの内容を話し合い、夏期休業中に家庭と連携して取り組んだ。幼稚部・小学部では、実施率が90%だった。	A		<ul style="list-style-type: none"> ・チャレンジウィークについては、個々に応じた内容で実施したり、ステップアップできるよう、次年度も家庭と連携していく。 ・職場体験や見学においては、引き続き、施設や保護者と連携し、個々のニーズに応じて行っていきたい。 ・施設見学等の実習を個々の進路希望に基づき行っていきたい。
		・中学部は、進路希望調査の実施と併せて、職場体験や見学を行う。	・中学部生徒全員が進路希望調査(5月)の結果を元に、職場体験(3年生)及び施設見学(1年生)を行った。			
		・普通科は、就業体験や学習活動の振り返り、まとめを行い、就業体験報告会の実施、キャリアパスポートの作成をする。	・普通科生徒それぞれが、就業体験についてまとめたり、日々の体験や頑張ったことをキャリアパスポートにまとめたりした。就業体験報告会は1月、キャリアパスポート報告会は2月に実施予定である。			
		・職業学科は、進路希望調査の実施と併せて、進路講演会を行う。	・職業学科は進路希望調査をもとに進路講演会を行った。			
エピソード	<p>チャレンジウィークは、学校で行っている課題を家庭でも行う内容、昨年の内容のステップアップを行った。保護者から、幼児児童生徒に対して、「ありがとう」、「これからもよろしくね」、「安心してまかせることができた」などの言葉があった。半数の保護者が、チャレンジウィーク終了後も続けていきたいということだった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学部生徒の保護者からは実際に職場実習の様子を見学いただいたことで、日中の過ごし方や細かな配慮についての疑問点が浮かび上がり、そこを施設に確認することができた。また、色々な施設の情報を知りたいと言う声もあり、オンラインで施設見学のできる施設や、情報を保護者に伝えた。 ・普通科生徒はそれぞれ、他の利用者と同様の内容で作業や余暇を過ごし、卒業後の生活をイメージすることができた。また、1人で余暇時間を過ごす際にどのようにして過ごすか担任や保護者と考え、ICT機器等の活用を進めた。 ・普通科生徒自身が報告会の司会を務めたり、質問をしたりするなど、生徒が主体で報告会を進めることができた。 					

重点目標 (3)	県内唯一の視覚障がい領域を対象とした特別支援学校として、学校全体で教育相談に対応するとともに、県内の視覚障がいのある幼児児童生徒や学校・教職員に対する持続可能なセンター的機能の取組を充実します。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
課の目標	本校のセンター的機能についての理解を促進するとともに、学校全体で教育相談に対応し、相談体制を充実します。				
サポート課	<ul style="list-style-type: none"> 地域の園や学校等に対し、本校のセンター的機能についての啓発活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> センター的機能についての啓発チラシを改定し、地域の園や学校に送付する。 学校ホームページのセンター的機能についてのページを改定し、啓発チラシや派遣依頼、相談カード等のデータを掲載する。 教職員を対象とした研修会での啓発活動を年3回以上実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 小学校への啓発チラシの送付とホームページデータの更新を行った。 弱視学級担任者研修会、教育調査員研修会、コーディネーター研修会、特別支援教育あどばいすタイムで、本校のセンター的機能についての啓発を行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> これまで実施してきた啓発活動を継続すると共に、新たな発信の機会を模索していく。 相談担当者以外との連携を取ることはできたが、事前事後の情報共有や相談時の補佐という形が多かった。相談活動を主として担当することができる担当者数を増やしていくことが今後の課題である。相談担当者以外の相談活動への関わり方を再考し、連携の回数を増やしたり、相談時の役割を少しずつ交代したりしていきたい。
	<ul style="list-style-type: none"> センター的機能に対する本校教職員の意識を高め、教育相談を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> センター的機能についての校内研修を年2回以上実施する。 サポート課の相談担当者以外が相談に携わるケース(巡回・来校相談における事前事後のケース検討、来校相談への対応等)を全相談件数の80%以上とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「本校のセンター的機能について」「視覚障がいのある児童生徒が使用する教科用図書等について」のテーマでの全体研修を2回実施した。 また、「教育相談の事例検討」というテーマでの学部研修を1回実施した。 全ての相談活動において、相談担当者以外との連携を取ることができた。 	A	
エピソード	<ul style="list-style-type: none"> 3回実施した校内研修後のアンケートでは、「相談についての具体的な内容を知ることができた」「実際の相談ケースを受けた事例検討をすることができた」「大まかにしか理解していなかった点字教科書、拡大教科書、音声教材等についての知識を深めることができた」等の感想が多く聞かれた。 相談担当者以外の教員に、遊びや課題学習を通して幼児児童と関わったり、視機能評価の補佐をしてもらったりすることで、相談の実際を知ってもらい機会を作ることができた。また、相談記録の閲覧や作成を通して、さまざまな事例や支援方法について伝えることもできた。 				

重点目標(4)		地域社会と連携した取組や、各学校・園との交流及び共同学習を改めて推進するとともに、視覚障がい教育への理解・啓発及びその取組発信に努めます。					
具体的な活動計画		評価指標		評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
				評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
課の目標		校外での作品展をとおして、視覚障がい教育における取組を発信します。					
サポート課	・幼児児童生徒の作品展を実施し、普段の保育・教育の様子や学校としての取組を発信する。	・県庁すだちくんテラスでの作品展を開催する。 ・作品とともに、作品の制作状況を伝えるキャプションや本校の学校案内等を合わせて展示する。	R5年9月19日～9月29日の間、県庁1階すだちくんテラスで作品展を実施し、幼児児童生徒の作品を展示した。併せて、学校案内や相談パンフレット等を掲示し、持ち帰りの用の資料も配置した。	A		すだちくんテラスはその場所の管理者が常駐しているため、作品等を安全に展示することができた。初めての活動だったため、周知が不十分だった。今後も継続し、周知にも力を入れていきたい。	
エピソード	・すだちくんテラスの管理者にたずねたところ、作品展を鑑賞後、配付資料を持ち帰る方が数名いらっしゃった。また、親子で熱心に鑑賞していた方もいらっしゃったとのことである。						
重点目標(1)		幼児児童生徒一人ひとりの障がい特性と教育的ニーズを踏まえた教育・保育活動や生徒指導に取り組みます。					
具体的な活動計画		評価指標		評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
				評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
学部の目標 課の目標 寄宿舎の目標		「個別最適な学びと協働的な学びの充実をめざして～見直してみよう いつもの授業～」					
研究・情報課	幼児児童生徒の障がい特性と教育的ニーズに応じた分かりやすい授業を実践するために、視覚障がい教育の基礎基本を踏まえた研修の実施や教員の言葉やICT等の教材を工夫した授業を実践することで、専門性の向上を図る。	①新転任者研修を4月に6回実施する。 ②個別の教育支援計画・個別の指導計画の研修を4月に実施する。 ③視覚障がい教育研修を年間13回実施する。 ④研究・公開授業の年間計画を作成し、職朝掲示板で実施日の連絡及び参観を促す。	・4月に新転任者研修(6回)及び個別の教育支援計画・個別の指導計画の研修を実施した。 ・視覚障がい教育研修を実施(13回)した。 ・令和5～7年までの研究・公開授業の実施計画を作成、今年度授業者の実施計画を作成した。	A		・幼児児童生徒の一人1台端末の活用が進み、ICT操作等の支援が重要となっているため、アクセシビリティ向上に関する研修等の充実が必要である。	
エピソード							

重点目標(1)	幼児児童生徒一人ひとりの障がい特性と教育的ニーズを踏まえた教育・保育活動や生徒指導に取り組みます。 ・ICT教育のステージを高め、家庭や関係機関との連携の場でさらに利活用します。 ・学校と家庭、寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の応用性を高めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
	寄宿舎の目標 学校、家庭と協働し、舎生一人ひとりの可能性を伸ばす生活支援に取り組みます。				
寄宿舎	<ul style="list-style-type: none"> ・舎生一人ひとりの障がい特性や実態を把握し、教育的ニーズに対応した生活指導・支援の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校のケース会や保護者面談等に、年間15回以上参加し、学校や家庭との連携を深める。 ・寄宿舎における個別の指導目標について、指導員間で年間3回以上検討し、共通理解を図るとともに一貫した支援を行う。 ・徳島県立聴覚支援学校寄宿舎と合同で、学校や他の関係機関と連携した寄宿舎研修を年間2回以上設ける。また、週1回以上、ミニ研修等を行い、寄宿舎指導員の専門性向上に努める。 ・全国の視覚支援学校寄宿舎と、オンラインによる情報交換を年間1回以上行い、視覚支援学校寄宿舎を取り巻く現状と課題を知るとともに他校の実践に学ぶ。 ・行事の立案・実施にあたり、舎生一人ひとりの実態に応じた役割を一人に1つ以上設定し、協調性や、社会性、責任感等を育てる指導・支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校のケース会や保護者面談に、寄宿舎指導員が、年間のべ15回参加した。 ・寄宿舎における個別の指導計画について、学期毎に検討期間を設け、年間6回、指導員間で、指導内容の共通理解を図り一貫した支援に努めた。 ・外部講師や校内の教員を講師に招き、介助の基本や、聞こえについての合同研修を年間2回実施し、盲ろう児への関わりについても学んだ。また、手話やe-ラーニング等のミニ研修を週4日程度行った。 ・筑波大学附属視覚支援学校主催の寄宿舎研修・実践交流会に、希望者がリモート形式で年1回参加し、37校の寄宿舎と情報交換を行った。 ・スポーツ大会や送別食事で、舎生一人ひとりの実態に応じた役割を担った。また協力して片付け等を行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・学校との連携を深めるために、学校行事の案内等の保護者宛文書を、寄宿舎にも一部届けてもらえるよう引き続き依頼していく。 ・寄宿舎における個別の指導目標については、指導員間だけでなく、学校、家庭と連携した支援を行うため、保護者面談等を活用し情報共有を図る。 ・両校舎生の実態や教育的ニーズを把握し、適切な生活支援を行うため、指導員の専門性や人権意識の向上が図られるよう、研修内容を充実させる。 ・今年度初の試みとして、他県の寄宿舎生と、本校の寄宿舎生によるオンライン交流会を実施した。今後も交流を継続していくためには、寄宿舎内のWi-Fi環境を整える必要がある。 ・合同行事では、両校の日程を合わせることが課題である。また、寄宿舎生の主体性が引き出せるように、計画段階から舎生の意見を積極的に取り入れ、一人ひとりが楽しみながら学べる内容を検討する。
エピソード					